1. 下笠の歴史

中大兄皇子（天智天皇）が蘇我氏を亡ぼし中央集権国家としての基礎固めをしたのが大化の改新である。壬申の乱は、天智天皇（626～672）の皇子・大友皇子（648～672）に対し、天智の弟で大友の叔父にあたる大海人皇子（天武天皇）（？～686）が、天武天皇元年（672）に兵を挙げた、日本の古代史上最大の戦乱である。天智天皇には後継者として子の大友皇子と弟の大海人皇子が並んでいたが、天智天皇の死後、都の大豪族が大友皇子をもりたてて弘文天皇とした。

大海人皇子は謀反を企んだと思われるのを嫌い都を離れて吉野に移ったが、大友皇子方との関係が悪化したので、672年（壬申）6月24日吉野から素早くに美濃へ移った。美濃国「安八磨郡」には皇子の湯沐邑（皇族の領地）があり、湯沐令（管理人のこと）の多臣品治がまず挙兵し、大海人皇子らの部隊に美濃の将兵は加わって勝利した。大海人皇子は即位して天武天皇となり、律令制度の整備や中央集権化を推し進めた。美濃は天武天皇に味方することにより、新政の施策はよく徹底した。その一つとして条里制的遺制の名称が地名として多く現存する。沢田に丁田、鷲巣・横屋・直江に一町田があり、上之郷に一丁貝戸、下笠に五町田の字名がある。また飯ノ木・船附に五反田、鷲巣に四反田・三反割、西岩道に六反長、中に三反田の字名がある。

奈良時代の中期、笠朝臣麻呂（朝臣は官職名）は、慶雲3年（706年）から、和銅3年（710年）の再任を経て、養老4年（720年）まで文武朝末から元明・元正朝の三朝14年間にわたり美濃守（国司）を務めた。任期中の和銅2年（709年）藤原房前により東海道・東山道諸国に対する行政監察が行われた際、尾張守・佐伯大麻呂らと共に国司としての実績を賞されて、功田（特別勲功者へ与えられた田地）11町・穀200石（1石＝約180L）・衣一襲を与えられた。さらに、和銅7年（714年）には吉蘇路（木曽路）を開通させた褒賞として朝廷から封戸（公民の戸の支給制度）70戸・功田6町を与えられた。またこの間の元明朝において、和銅元年（708年）以前従五位上、和銅4年（711年）正五位上、和銅6年（713年）従四位下と順調に昇進した。元正朝に入ると、霊亀2年（716年）尾張守を兼ね、養老3年（719年）按察使（地方行政監督機関）が設置されると、これを兼ねて尾張・三河・信濃の各国を管轄した。また、霊亀3年（717年）9月、元正天皇の美濃への行幸と養老改元については、笠麻呂の果たした役割が大きかったと考えられており、多度山美泉行幸の後に従四位上に昇叙（上級の官職等を授けられること）されている。養老 4 年（720 年）右大弁（朝廷の最高行政機関である太政官の官位の1つ）に任ぜられて京の都の官吏（役人）に戻った。

養老5年（721年）に元明上皇の病気に際して、その平癒を祈るために勅命で男女 100 人に出家が命ぜられると、麻呂も出家を請うて許され満誓と号した。

この地方に笠のつく地名が散見されるのは、笠麻呂の笠の字を一文字とり地域の名前にしたとも考えられる。

関ケ原の戦後慶長5年（1600）、大名領・旗本（徳川将軍直属の中級武士）領にならなかった土地は幕府直轄領とされた。美濃国における幕府領の支配は、合戦終了直後は間宮彦次郎・諸星藤兵衛・栗原（右衛門尉）（律令制の官位、右衛門府の三等官）などの代官衆が行なったが、翌慶長6年（1601）以降は、代官頭であり美濃国奉行の大久保（石見守）長安が支配した。

大久保長安は岐阜靭屋町に陣屋を創設し、美濃国内の政治・経済・軍事上の拠点を直轄領とした。そして大久保長安とその配下の代官山田（右衛門尉）直時・栗原（右衛門尉）盛清・徳永左馬助（左馬寮の次官）昌重・林（丹波守）勝正・岡田（将監）（近衛府の三

村名	石高
栗笠村	584石1斗5升3合
舟付村	702石9升
下笠村	459石8斗
大野村	113石9斗
烏江村	256石2斗
飯田村	188石7斗7升3合
江月村	753石8斗
口ケ嶋村	459石5斗5升

徳永昌重が支配した養老町の村

等官、または相当の武家官位。）善同・遠山久兵衛友政・山村甚兵衛良安などが7万3000石余の直轄地を支配した。そのうち現養老地方においては、徳永昌重（美濃高須藩主）が次表の8ヵ村高3554石2斗6升6合を支配した。しかし慶長17年（1612）に徳永昌重の父寿昌が死去したため、高須藩主（大名）の家督を継ぐ（相続する）必要性からか代官職を辞している。

元和元年（1615）では、養老地方は昌重から引き継いだ石原清左衛門一重の支配下となっている。石原清左衛門は、もと武田氏家臣であったが、家康に仕えて代官として活躍した。陣屋（役所が置かれた建物）は、はじめ可児郡兼山にあり、次に郡上郡上有知におかれていたが、元和元年上有知が尾張藩領となったため多芸郡下笠村へ移された。その後元和5年（1619）に、舟付・栗笠・烏江・下笠等は尾張領となったが、陣屋はそのまま下笠におかれ、正重（寛永10年～明暦2年、1634-1656）、正永（明暦2年～延宝3年、1656-1674）と続いた。しかし、元禄12年（1699）正利の代に伊勢国四日市へ移された。その間正保年間（1644-1648）には段海村・祖父江村・横屋村新田を支配したり、元禄四年（1691）7月26日越前へ転封（支配する土地の変更）になった小笠原貞信の跡地を支配したりした。陣屋趾は代官屋敷といわれており、八反歩一筆（8反＝7920m^2＝89m四方相当の面積）の大きな地所で、字東江下にあったが、今は次第に民家が建てられている。

慶長12年（1607）閏4月尾張一円を所領として成立した尾張藩は、同17年羽栗郡竹ケ鼻村他7か村7500石、ついで元和元年（1615）には可児郡錦織村他62か村3万2千石余、同5年（1619）には多芸郡蛇持村他141カ村4万8千石余と美濃国内の村々を尾張藩領に編入していった。その結果、尾張藩領61万9500石余のうち美濃国内にある尾張藩領が12万7043石余を占め、美濃国内藩最大の大垣藩をはるかに超えていた。

元和5年9月16日から尾張藩となった現養老町内の村々は次表の通りである。

村名	石高
栗笠村	604石1斗5升3合
舟付村	710石9升
下笠村	450石
大野村	119石9斗
烏江村	252石6斗
江月村	755石8斗
蛇持村	423石4斗7升5合
西岩道村	456石7斗9升
飯田村の内	874石2斗6升5合
口ケ島村の内	495石5斗5升

元和5年（1619）9月16日から尾張藩となった現養老町内の村々

濃陽志略（濃州史略、1756年完成）に田中喜兵衛の下笠城（1550～1600年頃か）があったが、そのあとは民家となっていると記されている。養老郡史によると田中喜兵衛は文禄の役（文禄1年（1593））に加藤清正らと共に朝鮮出兵しているので、この頃の城である。城は下笠代官所、素戔嗚神社付近にあったとされるが定かではない。

元和年中（1615～1624）新田開発、寛永13年（1636）検地、同19年除内検地、慶安4年（1651）本田検地、享保12年（1727）新田検地を受けている。

濃州徇行記に『此村は中堤一円押回せり（地域全体一周していること）。此堤は東の方伊尾川（揖斐川）の堤よりつづき、根古地、大場、有尾の界を囲り、又西より北へ屈曲してつづく。民居はすべて堤に沿い、7ヶ処ほどにわかれる。三ッ屋、懐、構、西江下、東江下、和田、野崎という。本田は中堤の内外にあり。字を内本田、外本田と云、内本田には田11町6反4畝21歩、畠13町9反2畝7歩あり。外本田には田1町6反3畝3歩、畠12町4反9畝26歩あり。畠7歩堤敷地引也。村東へ付、伊尾川までの間東西47-48町（約5．2㎞）ほどの間は一円新田也。字を除上田面、除下田面、除内田面という。除上には田51町6反3畝、除下には24町6反2畝2歩、除内には13町8反8畝26歩あり。其内畠6町3反27歩あり。本田は村傍にて地高し。新田は中通り故地卑く（不毛の土地）、年毎

に水深溜りし、旱年ならでは実りがたし(日照り年以外は実らない)。されば高1294石1斗3升2合の内1093石5斗4升、此田畠84町9反5畝(田82町5反6畝、畠2町3反9畝)、水損の分(水害不作分)、寛延元辰年(1748)より御代官検見の上三役銀引高に立来れり。此村は村立大体よき処(村の経済状態が良い)にて頭百姓も余程(多数)あり。其内構の田中權之右衛門、和田の小野作兵衛富戸(豊かな家)也。庄屋は3人あり。田中文左衛門、彦作、常三郎と云、高に准じては(石高比例した数より)耕夫多き処にて、他村の田地を作ると也。農事のみを以て世産(産業のこと)とす。民居も先年は皆平地に住せしが、水害を恐れ、今は皆堤上へのぼりしと云。外本田高15石7斗余と未新田138石9斗余の処は、堤外なれども、地高にして田麦を一円蒔付る也。然し津屋川決壊すれば此あたり水溢入る。村東に細池とて大きなる池あり。是は大野、舟付、下笠其外上村、悪水江の落溜也。此さき中堤に杁(水門)四艘あり。此水は小坪の杁へ落』

とあるが、この悪水落江が今の五三落江であって、笠郷地区住民の生命線であった。いわゆる「八通証文」に見られるように、低湿地帯住民の水害との戦いが偲ばれる。堀田や池が多かったので、明治14年には三間耕作舟(5.5m程度の農作業舟)を170艘所有していた。

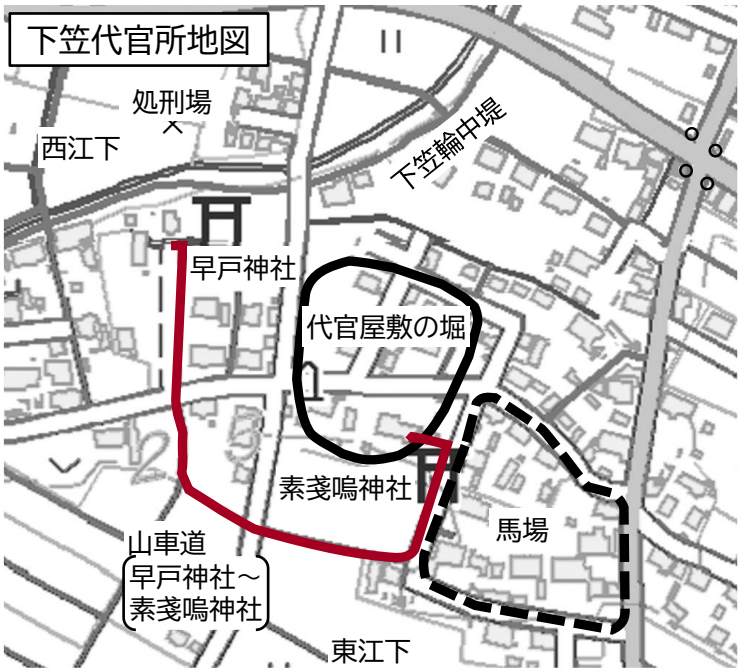
下笠は、石原清左衛門支配途中の元和五年(1619)尾張領となり、のち尾張藩付家老今尾藩主竹腰氏の所領となって明治維新にいたった。

明治以降の笠郷地区沿革　(参考:一石は米約150kg)

<table>
<tr><th>明治元年
村名</th><th>幕末
領主名</th><th>旧県名</th><th>明治元年
石高</th><th colspan="4">沿革</th></tr>
<tr><td>船附村</td><td>今尾藩</td><td>今尾県</td><td>1993</td><td>船附村</td><td>船着村</td><td rowspan="2">笠郷村</td><td rowspan="2">養老町</td></tr>
<tr><td>大野村</td><td>今尾藩</td><td>今尾県</td><td>179</td><td>大野村</td><td>M22.7.1合併</td></tr>
<tr><td>栗笠村</td><td>今尾藩</td><td>今尾県</td><td>978</td><td colspan="2">栗笠村</td><td rowspan="3">明治30.4.2
合併</td><td rowspan="3">昭和29.11.3
合併</td></tr>
<tr><td>下笠村</td><td>今尾藩</td><td>今尾県</td><td>1816</td><td colspan="2">下笠村</td></tr>
<tr><td>上之郷村</td><td>幕僚大垣預</td><td>笠松県</td><td>616</td><td colspan="2">上之郷村</td></tr>
</table>

2. 下笠代官所と石原清左衛門

石原清左衛門は、もと武田氏家臣であったが、家康に仕えて代官として活躍した。陣屋ははじめ可児郡兼山にあり、ついで郡上郡上有知におかれていたが、元和元年(1615)上有知が尾張藩領となるにおよんで多芸郡下笠村へ移された。その後元和五年(1619)に、舟付・栗笠・烏江・下笠などは尾張領となったが、陣屋はそのまま下笠におかれ、正重(寛永10年～明暦2年、1634-1656)、正永(明暦2年～延宝3年、1656-1674)と続いた。しかし、元禄12年(1699)正利40歳の時に伊勢国四日市へ移された。その間正保年間には段海村・祖父江村・横屋村新田を支配したり、越前へ転封(領地を他へ移されること)になった小笠原貞信の跡地を支配したりした。陣屋趾は代官屋敷といわれており、八反歩一筆(8反＝7920m^2＝89m四方相当の面積)の大きな地所で、字東江下にあったが、今は次第に民家が建てられている。下笠1457番地の北側は下笠代官屋敷跡である。さらにその北側は昔の刑の処刑場があった。馬場(乗馬の練習場)もあった。



養老郡志に、『享和3年(1803)7月石原庄三郎支配人弥太郎より碓井清八郎へ差上げたる覚書によれば「石原清左衛門と申すもの代官として元和年中下笠村に移住し、元禄12卯(1699)夏勢州四日市へ陣屋替仰付られ、正徳4年(1714)夏四日市より上方(大阪)へ引越、場所替被仰付、但屋敷は京三條に有之候。寛保3年(1743)大津へ陣屋替仰付られ候、斯くて下笠村御陣屋凡80年余に候。清左衛門在中は御料村支配被成、御支配の内下笠村新田御開発被成候に付、家来百姓扣地(控地、予備地のこと)等も出来仕候。勢州に御引越に相成候に付、下笠村家来百姓扣地等の義、尾州様に御伺被成候処、先規の通と御座候に付、前々通り御指置被成候(その様にする)。下笠村惣百姓(本百姓、租税を払う百姓)と石原清左衛門殿家来百姓入交り居候へ共、組方相分り、則ち家中組と相唱へ候。村方惣百姓は尾州様より御普請被仰下候度毎に3日後御仕払被遊候へ共、家中組(上級武士家臣団)百姓は前々より御除き(年貢諸役免除)御座候。御同人屋敷竝家来百姓共は、竹役等も御除き(竹の切り出し役免除)御座候。入水或は水損困窮の節は、御同人百姓の分は、御同人より夫食手当等有之候。石原清左衛門家来百姓、先年は50軒余も御座候所、追々尾州様へ御願の上、並百姓に相成候て、当時24軒に相成候」』

とあり、又濃州徇行記には「今(宝暦年間、1751～1764)家255戸、男女1409人、馬25匹。此村の内、石原清左衛門被官百姓家(主人に隷属した下級百姓)廿四戸、男女111人、馬1匹。古石原氏御役宅(代官所)此村にあり、今に其あとあり、されば被官百姓東江下というところにあり、手代(代官の下役)、家来の末(末裔、子孫)にて今に大

津より宗門改（信仰宗教調査）ある由」と記されているが、被官百姓は石原家から特別の庇護を受け、並百姓とはちがった待遇にあったようであるが、石原氏が下笠を去ってからは、次第に並百姓に成って数も減り、文政6年（1823）には 16 軒、74 人になっている。現在御家中組の子孫は東江下などに住んでいる。

中島家は、石原清左衛門氏の家臣団の内の一家だった。清左衛門の菩提寺は美濃市の清泰寺（美濃市殿町1439-1）である。石原氏は養老下笠の後は四日市、大津へと移っていったが、中島家のように、養老町にとどまる家臣もいた。

税を取り立てる代官側と税を払う住民側では中々うまくいかなかった。早戸神社は下笠字西江下に祀られており、代官石原清左衛門が崇拝していた。そのため代官の住んでいた東地域がお祭りの中心になっていたが、明治に立場が逆転した。その時に石原氏家臣の末裔側が早戸神社は地元の人に委ね、独自に素盞嗚神社を祀った。

石原清左衛門の家臣、小野氏、北垣氏が下笠を管理していた。下笠には代官石原清左衛門についてきた家臣団も住んだ。江戸時代に武士だった家が、後に地主となった家も多い。

3. 早戸神社

（住所）　下笠字西江下 1489 番地

（創建）　不詳

（祭礼情報）　10月5日に近い日曜日を早戸神社例大祭の「本楽」、以前は10月5日

（主祭神）　天手力男命と伝わる

○創立年月不詳であるが先祖からの伝える処に依れば、大昔に信徒の有志が相談して社地を寄付して創立したとの話だが、明治初年の大洪水で神社の古文書が流失して詳らかでない。

○天手力男命とは、「高天原での須佐之男命の乱暴な行いを悲しまれた天照大御神が、天岩戸に隠れてしまわれ、世の中は暗闇になった。そこで多くの神々が集まり、天照大御神を天岩戸からお出ししようと様々試みたところ、天照大御神が外の様子を窺おうと顔をのぞかせた。天手力男命は、その間に重い天岩戸をさっと引き開けて、天照大御神を外にお出しした、太陽の復活を連想させる力強くたくましい神」とされるため、日本各地の神楽で登場する。

○元和元年（1615）から元禄12年（1699）まで80余年間下笠陣屋で幕府の代官を勤めていた石原清左衛門家4代の早戸神社への信仰心が篤かったと伝わる。

○早戸神社は下笠字西江下に祀られており、代官石原清左衛門が崇拝していた。そのため代官の住んでいた東江下地域がお祭りの中心になっていたが、明治に立場が逆転した。その時に石原氏家臣の末裔側が早戸神社は地元の人に委ね、独自に素盞嗚神社を祀った。

○早戸神社は下笠の中と北でお守りをしている。中は平成22年現在、西江下・東江下・中村・和田・中島に分かれるが、昭和20年代までは、東江下は仲間にいれてもらえなかった。お祭りも、昔は10月4日だったが、東江下だけは次の日にやった。伊勢湾台風前後にお宮の改築をしたが、それをきっかけに祭りの日も同じにして仲間に入った。

○下笠の早戸神社の秋祭りは10月の第1土曜日である。下笠ではデンガラカシの打ち手がたくさんいる。デンガラカシは一曲のみで、下笠地区では中島地域が熱心に太鼓に取り組んでいる。西江下・東江下・中村・和田・中島などの部落がそれぞれ自分の部落の太鼓を引っ張って、笛を吹きながら練り歩く。時間を決めて合流し、全員揃ってお宮に行く。「白川」、「どじょう」、「デンガラカシ」の 3 種類の踊りがある。栗笠の富永日出子氏が踊りの指導を笠郷小学校の体育館で行っていた。また、秋祭りでは書き行灯を組み立てて、絵を描いた。最近は子供が参加して願い事などを書いている。それまで、昭和20年代は大人の行事だった。やがて青年団の作業となり、青年団が無くなってからは村の人の作業となった。書き行灯は、昔は全部で24張り釣って、太鼓の合図で落として奪い合いをした。中々まともな形のものは取れなかったが、取れたものは床の間に飾った。この行灯の奪い合いがどういった経緯で始まったのかは不明である。書き行灯は左義長で燃やしていたが、今は左義長を行っていない。

○昔の下笠では10月5日の早戸神社の祭典準備で、10月1日から集会所に若い衆が詰めた。祭りの後は後始末をするが、家に帰ると仕事で使われてしまうので、1週間泊まり込みで行った。祭典費用は、和田には4軒とその4軒の分家が3軒あり、計7軒でほとんどの費用を出した。その費用で、食事などを賄った。

○昭和 20 年代～30 年代は、年末年始の 31 日、1 日は社殿が開いており、青年団(神社係)が盗難防止のため、泊まり込みで不寝番をした。泊まり込みの時の食事は、地主の家から御馳走を重箱に詰めてもらった。野菜が多く、芋、蓮根、蒟蒻などの煮付けだった。1月1日は篝火をたいた。

○早戸神社の修復記録

寛保元年(1741)	修復
寛政3年(1791)	葺き替え
享和3年(1803)	葺き替え
文化12年(1815)	葺き替え
弘化4年(1847)	葺き替え
文久2年(1862)	葺き替え
慶応3年(1867)	御社　立替の棟札　(建物の建築等の記録として、建物内部の高所に取り付けた札)あり
大正11年(1922)	高麗狗(狛犬　;神社・仏寺の門前等に置かれた獣形　の像)、石灯籠　(火を灯して道に迷わないための塔)、鳥居等設置
昭和27年(1952)	鳥居、御手洗所建設
昭和28年(1953)	幣殿　(幣帛　(神前への供物)や、献上物　を授受する建物)、拝殿　建設
昭和30年(1955)	本殿　(神殿　:御神体　を安置する場所・建物)改造

○境内社

① 「御鍬神社」は豊受姫命を祀り、神名の「ウケ」は食物のことで、食物・穀物を司る女神であることから農業の守護神ともされる。由緒は不詳。豊受姫命は、豊受大神宮(伊勢神宮外宮)に奉祀(おまつりすること)される、豊受大神として知られている。

② 「御霊神社」は氏子の戦病死者を祀り、由緒は不詳

4. 八幡神社

（住所）　下笠字三ツ屋 2223 番地の 1

（創建）　不詳

（祭礼情報）　10月5日に近い日曜日を八幡神社例大祭の「本楽」、以前は10月5日

（主祭神）　応神天皇、比咩神、神功皇后、（注：応神天皇は神功皇后の子）

（比咩神 ： 特定の神の名前ではなく、主祭神の妻や娘、あるいは関係の深い女神を指す）

○創立年月日不詳であるが、里老（庄屋）の口碑（言い伝え）に依れば、往古（大昔）崇敬者の寄付により創設されたが其詳細詳かではない。

○本殿に正徳5年（1715）の棟札があると伝わる。八幡神社の旧拝殿は嘉永 6 年（1853）に建てられた。八幡神社の拝殿の前に灯篭が一対ある。向かって右側の灯篭には享保 9年（1724）、左側の灯篭には明和5年（1768）と書かれている。洪水や地震など何かあって40年くらい差ができたのではないか。最初は両方揃っていたが片方が倒れたり水で流されたりして新しく片方だけ作り直したのであろう。石の材質も左右で異なる。八幡神社は以前は下笠輪中堤防上に建っていたが、終戦後の土地改良で堤防の土を池の埋め立てに使う為三ツ屋から懐の北部、大場の八幡神社あたりまでの堤防が取り壊された。それに伴って三ツ屋の八幡神社も昭和27年（1952）頃に下に降ろされて平坦にした地面上に祀られた。境内の面積は堤防上に祀られていた時の倍くらいになった。お祭りの「でんがらがし」はどこでも同じ様な踊りだが、三ツ屋の八幡神社には大神楽があった。伊勢神楽の流れを引いていたかもしれない。神社で行われた獅子舞用の頭が2体あったが、昭和34年の伊勢湾台風で流されてしまった。獅子舞は明治の終わり頃までは毎年7月の土曜日に行っていたが昭和の始めには既に行われていなかったらしい。毎年境内で1月に粥占いを行う。昔は灯篭の頭（宝珠部分）を釜の蓋の重石にしてお粥を焚いたこともあったようだ。

5. 八剣神社

（住所）　下笠字上市場291番地

（創建）　尾張国愛知郡熱田神宮境内の八剣宮を勧請（神社の護符（お札）等を譲り受け神仏の分身を他の地に移して祭ること）したものと伝わる。創建年月不詳

（祭礼情報）　10月5日に近い日曜日が八剱神社例大祭の「本楽」、以前は10月5日

（主祭神）　日本武尊

○天照大神の弟、須佐之男命が出雲国簸川（斐伊川）の上流に棲む八つの頭と尾を持つ八岐大蛇を退治したとき、尾から宝剣が出てきた。その剣が天叢雲剣で、八岐大蛇にちなみ八剣とも呼ばれた。日本武尊はこの宝剣を持ち東国の征討（攻め込んで相手を討つこと）に向かい、火攻めに遭ったとき、この剣で草火を薙ぎ払い、反対に敵を焼き退けたことから草薙剣とも呼ばれる。日本武尊はこの剣を持たずに伊吹山の神と戦い負傷したのが原因となり命を失った。草薙剣は皇子の死後、尾張国の熱田神宮（愛知県名古屋市熱田区神宮）に安置された。

亡くなるまで日本全国を平定し続けた勇敢な日本武尊を讃えて八剣宮を創建したと思われる。

○八剣神社の修復記録等

元禄15年（1702）	造営の棟札あり
明治13年（1880）	神殿改造
明治29年（1896）	9月10日洪水の時、神殿流失
明治31年（1898）	5月10日神殿造営、落成

・明和5年（1768）5月の石灯籠（火を灯して道に迷わないための塔）がある。
・万延元年（1860）10月の石灯籠がある。

6.素戔嗚神社(天王さん)

(住所)　下笠

(創建)　創建年月不詳

(祭礼情報)

(主祭神)　牛頭天王(神仏習合における素戔嗚尊の仏教名)

○早戸神社は下笠字西江下に祀られており、代官石原清左衛門が氏神と崇拝していた。そのため代官の住む東江下地域がお祭りの中心になっていたが、明治時代になり武士の地位がなくなると同時に西江下の力が大きくなり、早戸神社の運営は西江下の地元の人に委ね、東江下地域は独自に素戔嗚神社を祀ったのが始まりである。

牛頭天王は神仏習合による素戔嗚尊の別名である。牛頭天王は印度(インド)の祇園精舎(インドにある修行寺院名である。釈迦が説法を行った場所であり、天竺(インドのこと)五精舎(5つの修行僧院)の1つ)の守護神。京都八坂神社や津島の津島神社の祭神である。

津島神社は明治初期以前は津島牛頭天王社と言われ、全国の牛頭天王社の本社である。下笠の牛頭天王社も江戸時代に津島牛頭天王社から御神符を受け、下笠の地へ勧請され祠を設けたと思われる。明治になって神仏分離の政策によった廃仏毀釈(仏教・寺院・僧侶の排斥運動)を避けるため、神仏習合(神と仏は表裏一体の密接な関係があること)の本地垂迹(神道の神は仏の化身)説による素戔嗚尊の本地(本来の姿)が牛頭天王であることから、社の名前を素戔嗚神社とし、牛頭天王の名前が表に出るのを隠したものと思われる。

○素戔嗚神社には伊勢大神宮、伏見稲荷、南宮大社の境内社3神が祀られている。

・伊勢大神宮(向かって右端の祠(建物))

由緒は不詳である。勧請した日付も不詳である。

伊勢大神宮とは、(伊勢)神宮の皇大神宮(内宮)と豊受大神宮(外宮)を合わせた総称であり、伊勢大神宮の他にも、大神宮などと呼ばれる。伊勢神宮まで参拝する代わりに2カ所の御神符を受け、燈籠等の形の祠にしたものを大神宮と呼び祠の社号として使用される。

下笠の氏子は2名による伊勢代参(代表による参拝)を現在まで続けているが昔は、行きは百姓の格好で卵を持って行き、途中で費用の足しにし、戻りは卵を売ったお金で紋付、袴に大小の脇差し(2本の刀)を差して帰ってきた。現在は各戸から1,000円を集めて伊勢神宮で「神宮大麻」を買い、神社総代が配っている。神宮では「御垣内参拝(特別参拝)」はせず、一般参拝のみ行っている。

・南宮大社(向かって左端の祠)

由緒は不詳である。勧請した日付も不詳である。

南宮大社は、以前は代参であったが、平成10年頃からは養老から近いのでその年の神社の総代全員で参拝している。

・伏見稲荷(中心の祠内の向かって左側の神社)

由緒は不詳である。勧請した日付も不詳である。

稲荷神社の稲荷の意味は「稲が生る」が変化したもの思われ、農業・五穀豊穣の神様であったが次第に商工業の神でもあるようになった。

伏見稲荷は総代2名で代参している。

7. 寶珠山浄誓寺

（住所）　下笠763

（創建）　創建 久寿2年(1155)天台宗 妙香山寶珠院観音寺
文明11年(1479)真宗寶珠山浄誓寺に改める

（宗派）　真宗大谷派(浄土真宗大谷派は通称)

（本山）　東本願寺

（本尊）　阿弥陀如来像

（報恩講）

寺伝によれば、久寿2年(1155)創建、天台宗に属し妙香山寶珠院観音寺と号した。文明11年(1479)改宗し浄誓寺と改めた。明応5年(1496)絵像本尊を受け(裏書現存)正保3年(1646)宣如上人(真宗東本願寺第十三代法主。慶長9年(1604)2月22日 - 万治元年(1658)7月25日)から親鸞聖人御影を受け(裏書現存)、元禄5年(1692)一如上人(同第十六代法主。慶安2年(1649)7月1日 - 元禄13年(1700)4月12日)から御消息(消息は手紙のこと、御が付き真宗の御文を意味する)を頂戴する(現存)。観音寺と称した当時は小字構、小字懐の西の地にあったと伝わる。文明13年(1481) に現地に移転した。永正14年(1517)の一石五輪(一個の石から彫った、上から宝珠形＝空輪、半月形＝風輪、三角形(笠形、屋根形)＝火輪、円形＝水輪、方形＝地輪で構成された五輪塔)がある。

狭間とは寺院では本堂の内陣と外陣の境の欄間に飾る彫刻を指す。下笠・浄誓寺の本堂の狭間3枚は、龍が雲の波間に浮んでいる様子を彫ったもので、3匹の龍がそれぞれ違った形で、眼光鋭く玉をねらって浮んでいる様子を表現している。美濃国藤原重興の銘があり、早瀬忠兵衛(通称 彫忠)の作で養老町の重要有形文化財に指定される。

○早瀬忠兵衛藤原重興(彫忠) ： 彫忠は、天明5年(1785)生まれ、天保11年(1840)7月8日に没した高田出身の彫刻師。遺作としては、東町軸組(同祭、諸説あり)、蓮光寺(同町直江)、専念寺(同町高田)、浄誓寺(同町下笠)、在徳寺(柏尾)等がある。彫忠の弟子には、西濃地域で「民弥彫り」の名で活躍した彫刻師の佐竹民弥義寄がいる。

8. 弘誓山浄雲寺（ぐぜいざんじょううん）

（住所）　下笠字中島 634

（創建）　創建建暦（けんりゃく）2年(1212) 宗祖親鸞法子(弟子のこと)慶雲創建（しゅうそしんらんほうし　けいうんそうけん）

（宗派）　真宗大谷派(浄土真宗大谷派は通称)

（本山）　東本願寺

（本尊）　阿弥陀如来像（あみだにょらい）

（報恩講）

9. 下笠薬師堂

9月の第2日曜日に下笠薬師堂の祭りを下笠区全体で行う。南北朝時代の水害で下笠薬師堂の阿弥陀如来像が知多半島まで流れ、今は常滑市海音寺で浜薬師として祀られている。返してもらうようかけあった結果、江戸時代末期に薬師堂に返ってきたのは新しく彫られた小さい仏様であった。海音寺の浜薬師は60年に1度にしか開帳されない秘仏になっており、前回は2012年ご開帳された。下笠からはバス１台で毎年お参りに行っている。

下笠薬師如来の言われは、今から約700年前の建武2年(1335年)、中世(南北朝時代)までさかのぼる。昔から下笠地域は地盤が低く、大雨の度に堤防が決壊し、田畑や家が流されるなど、幾度も災害にあっていた。建武2年(1335年)の大洪水によって津屋川、牧田川の二つの川が氾濫し、当時村にあった薬師如来堂と御本尊も濁流と共に流され、御本尊は牧田川、揖斐川、木曽川を下り伊勢湾を漂い、知多半島の大野海岸に流れ着いたところを発見されたと言われている。

大野浜薬師如来略縁起(太平洋戦争前に発刊された)

大野浜薬師如来略縁起

浜薬師如来は海潮出現の御霊像なり　往昔建武二年(一三三五)同郡山田村に富者あり　一子痿癖なれば父母之を悲み薬師如来を信仰せしが或時戌亥の方に光明の天に昇るあり　怪み尋ね到れば盤石の上に尊像の惣現し給ふを見て感涙肝に銘し直に草堂を建立し尊像を安置し奉りて祈念せしに忽ち歩行自由の人となりたり　遠近伝へ聞きて信心せざる者なし是浜薬師の起源にて其盤石は来迎石と称し今猶堂前にあり

其頃一人の白子あり此尊像を祈り如来出現の浜に出でて潮に浴せしに日毎に身休麗しく紅顔となりければ人々不思議に思い潮湯浴の功ある事を知るに至る　今の海水浴と言うは此如来出現の霊跡より始まれり

寛永(一六二四～一六四四)年中法橋宗貞氏難病平癒の御礼に再建せしが今の堂は明治初年の建立なり

第九世即州和尚或夜の夢に如来枕上に現れ給い汝に一の秘法を授与すべし瘡毒の人に用ひよと告給ふ　是如来夢想の最初なり　明治維新後は政府の規則に従い医王丸と改めて梅毒一切の人々に用い如何なる難症にても必ず全快して霊験の著しきは普く人の知る所なり

此他に赤痢病中暑下痢等を治する名薬あり梅毒と痢病との二方を以て世に大野浜薬師の夢想と称す　是縁起の大略なり

大野町　海音寺

(注)痿癖：しびれ病、戌亥：西北、白子：白皮症者、瘡毒：悪性のできもの、痢病：下痢を伴う病気、中暑：暑気あたり

「大野浜薬師如来略縁起」によれば、建武2年(1335年)、大野郡山田村にしびれ病にかかった子を持つ親子がおり、父母は悲しんで薬師如来を信仰していた。ある時、海から光明が昇るのを見つけ、その海面に薬師如来が現れたので御堂を建立し薬師如来像を安置したところ、たちまち病は回復し歩行できるようになった。また薬師如来の盤石(基礎の石)は来迎石と呼ばれ、現在でも海音寺内の堂前に安置されている。大野町海音寺では「大野浜薬師如来」と命名し現在まで安置されている。その後、何百年も過ぎてから知多の海音寺に祀られている浜薬師如来は、下笠薬師如来とも呼ばれている事を下笠の住人は知ることとなる。海から拾われた薬師如来像に「下笠薬師如来」と明記されていたと考えられるのと、ほとんどの薬師如来像は座像であるのに対して、この薬師如来像は立像のため数

が少なく区別をつけやすかったと考えられる。江戸時代中期に薬師如来像の返還を何回も求めても拒絶(きょぜつ)され続けたが、江戸時代末期に大野浜薬師如来像とは明らかに異なる小さな薬師如来像が返還された。この薬師如来像は、鑑定(かんてい)によると江戸時代末期に製作されたものと推定されている。

それをきっかけに信心深い下笠の人達によって、海音寺の人達と交流が始まり、今年も9月7日(現在は9月12日に近い休日)に下笠薬師堂の例祭が海音寺住職の磯谷興村師を始め門徒衆(もんとしゅう)を招き、下笠区民の慰霊(いれい)と平和と安全を祈って厳(おごそ)かに務(つと)められている。また、毎年11月3日に海音寺においても同様の儀式が行われ、下笠からも大勢で参拝している。特に海音寺においては、60年毎に大野浜薬師如来の御開帳儀式(ごかいちょうぎしき)が盛大に行われる。この次の御開帳は西暦 2072年(令和 54年)になる。

下笠薬師堂は、毎年大晦日(おおみそか)から元日にかけて大勢の参拝者で賑(にぎ)わい、皆さんで除夜の鐘を鳴らし、それぞれの希望をお願いする機会となっている。

10. 市場千軒の石碑

笠郷校下の南西部、下笠字懐の田んぼの中に「市場千軒之霊」と刻まれた石碑が昭和二十七年(1952)に建てられた。裏には八百年位前、大跡新田(サラダコスモ工場付近、宝暦年間(1751－1763)までは池であった)の東から下笠にかけて、市場千軒という集落があって、家も沢山あり市場も繁盛していたと記されている。

一方、栗笠の東はずれには今も市神神社があり、享保十七年(1732)頃からこの付近で、六斎市という市が毎月六回、日をきめて開かれていたことが記されているが、市場千軒はそれよりもずっと昔のことである。津屋川の下流から下池に入り、この地へ通ずる船路(川を利用した水路)によって品物が集められたと思われる。養老町から根古地や今尾を結ぶ、津島街道の完成は江戸時代になってからなので、水上交通に便利な水系があったことが栄えた理由であったと思われる。

しかし、元亀年間(1570～72)伊勢長島(現在の三重県桑名市、伊勢国と尾張国の境界付近)を中心とした地域で浄土真宗(一向宗)本願寺門徒らが蜂起した一向一揆が激しくなり、織田信長との間で大きく分けて三度に渡る激しい合戦が起こっている。この時の戦火の広がりによって火災にあい、市場千軒の集落は殆ど灰になってしまったと伝えられている。人々は他の土地へ移ってしまって今では名前だけになっているが、下笠には今でも上市場・下市場という小字名が残っている。

平安時代末期(1150年頃)に市場が始まり戦国時代に信長に焼き討ちされるまで(1570年頃)の、町の発展や繁栄の様子を伺い知るものは何も残っていない。昭和二十七年(1952)に、先祖の霊をなぐさめ昔のことを偲び伝えるために、構と懐の人たちが協力してこの碑を建てた。

11. あほ除（よげ）（除 ： 輪中の内側の役目がなくなった小堤防）

あほ除は明暦（めいれき）2（1656）年に築（きず）かれた。押越（おしこし）村から下笠村にかけては幕府領（ばくふりょう）、尾張藩（おわりはん）領、高須藩（たかす）領などが入り組む土地であった。そのため、あほ除は尾張藩と高須藩の立ち合いのもと、口ヶ島（くちがしま）、西岩道、岩道、下笠、中島（なかじま）などを水害から守る目的で作られた。この除は養老山地の勢至谷（せいしだに）からの水を金草川（かなくさがわ）に流してもいるので、勢至谷請堤防（うけていぼう）ともいわれた。除の高さは押越村を守るため、押越村の宅地の高さまでとされている。除跡は現在も押越地区に残っており、厳重に維持されている。

「江戸時代から出水の度に除番が置かれていたが、輪中に浸水することはなく、その役目を果たすことがなかったので「あほ除」と呼ばれるようになった」という話が伝わっている。

12. 下笠輪中（しもがさわじゅう）

江戸時代より昔の西濃地方は、土地が低い上に大きな川がいくつもつながり合って網（あみ）の目のように流れていました。土地が低く水につきやすい所では、村の周りを堤（つつみ）で囲って、水が入らないようにして田や家を守りました。ちょうど村々が堤の輪の中へ入ったように見えるので輪中と言いました。昔の笠郷は栗笠（くりがさ）・船附（ふなつき）・大野・下笠（しもがさ）・上之郷（かみのごう）の五つの村がぐるりと輪中堤防（ていぼう）に取り囲まれた「下笠輪中」の中にありました。今でも輪中堤の面影（おもかげ）がところどころに残っています。下笠輪中は伊尾（いび）川より西では最も古い輪中で、江戸時代の初期に原型は完成しました。また下笠輪中は金草川、牧田川、伊尾川、津屋（つや）川に囲まれたひとまわり大きな輪中（多藝（たぎ）輪中）の中にも入っています。このように、大きな輪中の中に更に小さな輪中が含まれたものを複合（ふくごう）輪中といいます。昔の人の水とのたたかいや苦労がしのばれます。

下笠輪中は低湿地の開墾（かいこん）であったので、排水に苦労しました。下笠輪中内の栗笠、船付、大野、下笠、五ケ村のうち上之郷村を除き、他の四ケ村だけが合同して「除」（輪中の中の小さい堤防）を巡らし排水路をつくりました。これが下笠輪中悪水落江（あくすいおちえ）です。この悪水落江は、根古池（ねこじ）輪中、釜段（かまだん）輪中、小坪（こつぼ）輪中などの境を借地して、全長2，600間（約4，700㍍） 小坪で津屋川へ排水しました。寛文11年（1671） と翌年にかけて関係する八地区間で、いわゆる「八通証文（しょうもん）」が取交（とりか）わされました。この証文により、落江の保全（ほぜん）には笠郷に絶対的責任があり、江代米（えだいまい）や藻刈（もかり）についての取り決めがなされたが、幕府直轄高須藩領（ばくふちょっかつたかすはんりょう）の上之郷は除外されている。江代米とは輪中の悪水を落水するにあたり、川や江を借りる為（ため）にその面積に応じて課（か）せられる年貢米（ねんぐまい）のことである。また、藻刈とは川の清掃（せいそう）を意味する。この落江は現在の五三（ごさん）川で、下笠鼻ヶ橋（はながし）と小坪（こつぼ）間2600間（けん）（約4．7km）を通して津屋（つや）川へ落とすように人工的に掘った水路である。

13. 野崎の忠魂碑

この忠魂碑は、大正4年(1915)に、下笠字野崎地区の先人を慰霊するために、大正天皇の御即位記念の事業として野崎組中の人々が参加して建立されました。碑文は杭陽敬書の銘がある。

裏面碑文に「御即位記念大正四年仲秋建設、下笠青年会野崎支部会員発起、野崎組中」と書かれている。野崎では日露戦争で多数の戦死者が出たので、その冥福を祈る慰霊碑として建立された。後に支那事変、太平洋戦争の戦死者も合祀(複数を一緒に祀ること)されている。

○ 忠魂碑 ： 郷土出身の戦没者の慰霊・顕彰のために設けた記念碑的な性格のものであり、神式、仏式など特定の宗教とのかかわりは本来希薄であるが、年代を経るに従いその性格が変わる碑も存在する。

14. 新道記念碑

養老町上之郷と養老町下笠をつなぐ、県道225線沿いに新道記念碑と刻(きざ)まれた石碑が建っている。

大正四年(1915)に大正天皇の御即位を記念して上之郷と下笠の間に新道が作られた。幅二間(けん)(3.6m)、長さ約一千間(約1,800m)で当時としては立派なものであった。今の県道小倉(おぐら)・烏江(からすえ)・大垣線の一部となっているが改修が重ねられている。ただ、明治の地図をみると、既(すで)にそれらしい道が描かれているので、新設ではなく、改良だったかもしれない。ちなみに、この頃、養老町はまだなく、この辺りは笠郷村であった。(養老町制施行(ちょうせいしこう)は昭和29年(1954年)、同年11月3日に合併(がっぺい)した。)

15. 七里　不着

生　年：　天明元年(1781)生

没　年：　文久　元年(1861)5月15日没

出身地：　養老町下笠

名は豊次郎、不着と号した(本名の他に別名を名乗る)。俳人である。

七里家は江戸幕府の代官 石原　清左衛門　一重 が、元和元年(1615)に下笠村に陣屋(仕事をする役所、屋敷)を構えた時からの家来であったが、元禄 十二年(1699)陣屋が廃止され、石原氏は四日市へ移ったので、帰農(再び農業に戻ること)して被官　百姓 (有力農民に身分的、経済的に従っていた農民)と 控地 (予備地)を支配していた。不着は 温厚 でよく父母に 仕 え、幼時から学に志し、経書 (儒教 の中心書物)を 耽 読(夢中になって読む)し、俳句、和歌を 嗜 んだ(愛好した)。また、仏法に深く信じて、東本願寺に 赴 いたり、 参禅 したり、修行につとめた。晩年は京都に住み、雲華院　大含 (江戸後期の浄土真宗の僧、真宗大谷派の学僧、現 大谷大学の学長職を務める)と親交を重ね、また 九条　関白　尚忠 の 別殿　普請(別の宮殿建設)にも 功 労 (大きな功績と、それに伴う労苦)があったので、尚忠から「世にまれの齢にあまる八十年へて老いせぬかけの栄ともみむ]の懐紙をおくられている。

また不着の俳句に、以下のものがある。

「 掃 除した　跡 へころりと　落葉かな」

「　蕣　に　あさ起こしたる　男かな」

16. 田中　長右衛門

生　年：　文化四年（1807）頃生

没　年：　明治二十二年（1889）八月三十一日没

出身地：　養老町下笠

懐の人。旭松庵　静和坊と号した。俳人である。

美濃再和派十三世道統（その流派を統率する人）の魯松庵に師事し、十四世道統の耕月庵と同時代に活躍した。耕月庵が道統継承の賀筵（お祝い酒宴の席）を本巣北方の西運寺で催した時、全国から参会した風士（詩歌・書画などが趣味の人）や近隣の雅客（詩文や芸能を愛好する人）から寄せられた俳句集「蘭の薫」はじめ、「墨直集」の中に、静和坊の作品か記載されている。

魯松庵は度重ねて静和坊宅を訪れ宿泊した記録もあり、魯松庵の作品も保存されている。また、養老寺本堂前に以下の奉納句碑がある。

（表）　萍や登々満類処に　花の咲く

下笠　旭松庵　静和坊

（裏）　明治十二年（1879）卯六月

下笠村　田中泰造　重政

（※田中長右衛門の生年について、山口一易「萍（長右工門）句碑のことども」「養老町の文化財」第百号（1997）の静和坊自筆句集のおわりに記される「明治三年、六十三才」を参考とした。）

17. 伊藤（いとう）　重松（じゅうまつ）

生　年：　明治三十年（1897）5月20日生

没　年：　昭和四十一年（1966）8 月24日没

出身地：　養老町下笠

三ッ屋の人。篤農（とくのう）家（農業に熱心で研究的な人）として知られ、戦時中・戦後の食糧難時代に対して土づくりに励んだ。米の増産に尽力（じんりょく）し、諸方（しょほう）（さまざまな場所）に招かれて稲作の指導にあたった。戦前戦後の食糧の少ない時に、硫安（りゅうあん）（硫酸アンモニウム）を用いた栽培法を考え、県内外の人々に伝えた。

戦争で食糧難（しょくりょうなん）になると硫安が少量ながら配給された。その硫安をどのように有効に使ったら米がたくさん取れるかという研究があちこちでなされた。笠郷地区の篤農家（とくのうか）の双璧（そうへき）は、三ツ屋の重松氏と上之郷の川口（かわぐち）銀蔵（ぎんぞう）氏であった。普段二人とも行き来はないがお互いに意識はしていたようだ。

ライバル関係だった二人の農法はぜんぜん違っていた。

海津はもちろん三重県あたりからの広範囲にわたって農業関係者は重松氏のところに研究に来ていた。

重松氏の農法は最初土地の実力を試すために無肥料で苗を植えて、ある程度成果を見た。その後、1 本の苗からたくさん増やした苗を、実力のある田には少し、実力のない田には多めに与えて様子を見た。それからある程度分蘖（ぶんげつ）（茎の根に近い節から新しく茎が発生すること）させて、穂の出る前に追肥（ついひ）を補った。そうすることで力葉（ちからば）という、最後に出る葉が大きくなって実の方に入らない。その結果僅かの肥料で米の多収穫が可能になった。

重松氏は息子が農業をやるのに対して絶対にやり方を命令するようなことはなかった。自分が知識を吸収するのに貪欲で視察に来た方の後をついて回ってあれこれ聞いているくらいだった。

当時多くの農業の研究者が来たにも関わらず、重松氏は自身の研究成果をまとめた文献は残していない。全部口伝えだった。重松氏の教え子が稲の標本をたくさん集めてみえたが水害で全部流れてしまった。

農業の研究者といっても重松氏のところに来た方たちはみな普通の農家の人々だった。

昭和三十七年（1962）に教えを受けた人々により、伊藤重松の石像と「耕得天真（こうとくてんしん）」と刻まれた石像が立てられた。「耕得天真」とは一生の信条（しんじょう）を表わしたものであり、伊藤重松の自作熟語である。

□　耕得天真：「田畑を耕すようにせっせと働いて生計の資産を得て、自然のまま飾り気なく生きる」ことと思われる。

18. 小野　文五郎

生　年：　嘉永四年(1851)6月23日生

没　年：　昭和四年(1929)2月18日没

出身地：　養老町下笠

下笠の人である。長年にわたって笠郷村議会議員の他多くの役職を兼ね、その闊達(広い心を持ち細かなことに制限されない)な性格と才腕(物事を巧みに処理する才能と手腕)により郷土民の信望厚く、広く行政に多大の貢献をした。特に輪中の治水事業及び悪水排除・土地改良事業には献身的に尽力した。

小坪に五三組合排水機を設置するにあたっては、東奔西走寝食を忘れて事にあたり、彼の先見の明と行政的手腕は高く評価せられた。この排水機は、当時としては最新鋭の蒸気機関を使用したもので、その大きな排水量は人々を驚嘆させ、わざわざ見物に来るものが多かったものである。この排水機の設置によって笠郷村の冠水の不安は解消し二毛作が可能となり、食糧増産が大いに進み、又、土地改良工事も進められるようになった。

その葬儀は、笠郷村葬として盛大に行われ、その遺徳(死後にまで残るその人の立派な業績)をしのぶ人達の多くの会葬者があった。

19. 立心(りっしん)第一小学校

明治6年(1873)下笠村中嶋の浄雲寺を借り受け仮に立心(りっしん)第一小学校を開校、大野村に立心第三小学校、栗笠村に勉旃(べんせん)義校、船附村に修文(しゅうぶん)義校が創立せられた。明治政府はこの頃全国で学校制度を始めており、資金的に余裕はなかった。そのため学校建設資金は地域からの寄付金によることが多く、義校の義は寄付を意味し愛知県、岐阜県で多く存在した。明治8年(1875)石原清左衛門屋敷跡に立心第一小学校校舎を新築し、明治19年(1886)下笠尋常小学校、及び小笠簡易小学校と改称した。

明治24年(1891)10月28日、濃尾大地震による校舎全壊のため、下笠村和田の小野久八氏住宅を仮校舎としている。明治26年(1893)8月新校舎新築。敷地面積は704.2坪、運動場は315坪、校舎は181坪(教室 104坪、廊下25坪)の広さであった。

明治34年(1901)、小学校の規模は次の通りである。

校下戸数 381戸、 人口 1,932人 (男975人、 女957人)

在籍児童数 1年 48人 (男16人、 女32人)
2年 46人 (男19人、 女27人)
3年 41人 (男25人、 女16人)
4年 45人 (男27人、 女18人)
計 180人 (男87人、 女93人)

明治41年(1908)4月、尋常科第5学年を新設、明治42年(1909)4月、尋常科第6学年を新設

明治44年(1911)、小学校の規模は次の通りである。

在籍児童数 1年 43人 (男23人、 女20人)
2年 45人 (男23人、 女22人)
3年 53人 (男24人、 女29人)
4年 36人 (男20人、 女16人)
5年 47人 (男24人、 女23人)
6年 23人 (男14人、 女9人)
計 247人 (男128人、 女119人)

大正7年4月1日 笠郷尋常高等小学校の設置により、立心小学校は廃校(はいこう)となる
校下戸数 800戸、 人口 4435人(男2218人、女2215人)
尋常科 623人(男294人、女329人)
1年 119人(男63人,女56人)、
2年 95人(男40人,女55人)
3年 108人(男50人,女58人)
4年 110人(男47人,女63人)
5年 107人(男56人,女51人)
6年 84人(男38人,女46人)
高等科 43人(男31人、女12人)
1年 29人(男20人,女9人)、
2年 14人(男11人,女3人)、
合計 666人(男325人,女341人)

大正8年5月28日 新校舎建築立柱式(りっちゅうしき)(基礎工事後、主要な柱を建てる時に行う祓(はら)い清めの儀式)を挙行(きょこう)

大正9年2月2日 全校、新校舎において授業開始

昭和16年4月1日 笠郷国民学校と改称

昭和22年4月1日 学制改革により高等科を廃止して、中学校として分離し、笠郷村立笠郷小学校と改称(かいしょう)
校下戸数 857戸、 人口 4417人(男2186人、女2231人)
児童数 570人(男292人、女278人)
1年 111人(男53人,女58人)、

2年　　84人（男46人，女38人）
3年　　74人（男36人，女 38人）
4年　　97人（男46人，女51人）
5年　　94人（男57人，女37人）
6年　　110人（男54人，女56人）

昭和29年11月3日　　町村合併により養老町立笠郷小学校と改称
昭和31年10月　　校舎新築校地拡張（校舎　727坪、運動場　1739坪、校地　3480坪）
昭和59年10月11日　　笠郷小学校校舎新築工事起工式
（元笠郷中学校跡地、鉄筋コンクリート造、3階建、建築面積　3276㎡）